

# 学位論文抄録

郡部における高齢者の抑うつと独居の関連  
(Association with depression and living alone among the elderly in a rural community)

福永竜太

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神科学

指導教員

池田学教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神科学

## 学位論文抄録

[目的]超高齢化社会の到来をみた本邦では、うつ状態は高齢者において最も重要な精神保健問題の一つである。本邦におけるこれまでの地域調査では、高齢者のうつ状態や自殺と家族形態との関連については同居家族がいる者に多いとする結果が報告されているものの、北部日本での研究がほとんどである。

そこで、本研究では、熊本県の郡部における高齢者のうつ状態に関連する要因として、独居群と同居郡との間での関連要因の差異を明らかにすること、そして高齢者のうつ状態への予防介入の一助にすることを目的とした。

[方法]熊本県山間部のとある町の中心部に在住する、65歳以上の在宅高齢者1552名を対象に、郵送法によるアンケート調査を実施した。うつ状態はGDSで評価し、過去の研究に則り6点以上をうつ状態とした。うつ状態とそれに関連する因子を評価した。

[結果]有効回答は964人であった。うつ状態の対象者は20.5%を占めた。独居および配偶者の欠如はうつ状態と強い関連があった。

同居群で通院、食欲、睡眠、収入のある仕事、死についての考え、経済的不安、生活上の悩みの項目全てでうつ状態との関連が認められた。独居群にて食欲、死についての考え、経済的不安、生活上の悩みで関連が認められた。両群それぞれにロジスティック回帰分析を行なったところ、うつ状態に影響を与えている因子が同定できたが、希死念慮、生活上の悩みは両群で共通していた。

多重線形回帰分析にてもやはり独居はうつ状態と関連を認めたが、良好なソーシャルサポートを持っていることにより独居の影響の有意差が否定された。

[考察]地域高齢者における独居と抑うつに関連があった点は、世界的な傾向と同様であった。本邦の過去の報告との差異は地域差や時代の変遷による可能性がある。独居か否かは重要であるが、ソーシャルサポートおよびサポートを受ける側の姿勢や認識もまた重要であるかもしれない。

[結論]独居が熊本県の郡部における高齢者のうつ状態の関連要因であることを確認した。しかしそのみが決定的な因子とはなり得ず、高齢者側の要因、例えば、主観的な十分なソーシャルサポートは独居によるリスクを補える可能性がある。